

『現代生命哲学研究』第7号(2018年3月):28-35

罪への恐れと命の尊厳

取材現場から

広瀬一隆*

1 はじめに

新聞記者として10年近く働く中、多数の死傷者を出した交通事故や殺人事件、医療現場など、人々の生死に関わる出来事取材してきた。私の心に、失われた命の尊厳が深く刻まれた取材がある一方、現場で1週間ほど聞き込みをしたにもかかわらず、亡くなった人について深く考えずに終わった殺人事件があった。また現在、全国的に実態解明の動きが広がっている旧優生保護法下での強制不妊手術を調べる中では、周囲から尊厳を忘れ去られていた人に出会った。なぜ命の尊厳は、常に立ち現れて来ないのか。そして尊厳を忘れ去った場合、どのような事態を招くのか。本稿では私の経験を通じて、命の尊厳が立ち現れる契機と、尊厳を見いだす能力の限界から生じる「罪」との関係を考えてい。

2 亀岡集団登校事故 — 立ち現れる命の尊厳

2017年4月23日、私は幼い女の子の遺影を抱いて、京都府亀岡市の通学路を歩いていた。2012年の同じ日、集団登校中の児童らに無免許の少年が運転する車が突っ込み、死傷者10人を出した事故現場だ。幼い女の子は、7歳で犠牲になった小谷真緒さん。遺影の中ではにと歯を見せて笑っている。父親の真樹さんが初めて持たせてくれた。

事故から5年間、真樹さんをはじめとする遺族から、何度も真緒さんの話を聞いてきた。3人姉妹の真ん中。ひょうきんな性格で、姉妹をよく笑わせた。七五三では口紅を塗って着物姿でおめかしした写真も撮った。事故の前日にお気に入りの靴を買ってもらったが、23日は雨の予報だったので履いていかずに取っておいた。

たくさんのエピソードを知っているのに、真緒さんとは一度も会ったことがない。見知らぬ他人とは思えないが、いったいどのような関係性と名付けられ

*京都新聞記者 電子メール theshelteringsky89@gmail.com 1982年、大阪生まれ。滋賀医科大学卒業。医師免許取得後、2009年に入社。犯罪や医療、科学を取材し、哲学など人文学と結びつけて考えることをテーマとしている。

いいのだろうか。柔らかい日差しの下を歩きながら、そんな疑問がわき起こった。

亀岡の集団登校事故は、発生当日から現場に入った。大きな事故や事件が起こった時、状況を把握する現場の聞き込みが重要となり、大量の記者が投入される。目撃者を探して事故の状況を確認するだけでなく、死傷した人の名前や人柄を聞き出して記事にする。

亀岡市の事故現場は規制線が張られ、内側では警察が鑑識活動が続けていた。規制線の外では、記者たちが一軒一軒呼び鈴を鳴らして話を聞いている。ほかの報道各社は京都だけではなく、近隣の府県からも応援が来ていた。私自身、1日で100人近く話を聞いたのだろうか。子どもや妊婦が亡くなった痛ましい事故という気持ちはあったが、騒然とする現場で慌ただしく取材に迫られていた。どれだけ亡くなった人たちや遺族に思いを寄せていられたか。心もとない。

亀岡集団登校事故は、全国的なニュースとなった。少年の無免許運転によって10人が死傷したにもかかわらず、罰則が重い危険運転致死傷罪＝当時＝が適用できなかった点がクローズアップされた。遺族らは街頭の署名活動などで危険運転致死傷罪の適用を訴え続けた。「怒り闘う遺族」といったイメージが報道で広がった。刑事裁判では危険運転致死傷罪ではなく、自動車運転過失致死傷罪＝当時＝などが適用されたが、法改正を求めてさらに活動が続け、無免許運転への罰則強化につなげた。

怒り闘う遺族としての活動を通して、法改正にまで至った意義は大きい。ただ、事故から5年以上にわたって付き合いを重ねてきた私には、カメラの前で怒りを露わにする姿より、取材の合間に真樹さんがふと見せた振る舞いが、心に刻まれている。

事故現場でたくさんカメラを前に、真緒さんへの思いを語った後、しゃがみ込んで涙が止まらなくなっていた真樹さんの背中。事故現場近くで交通事故防止のための啓発活動に参加し、丁寧に頭を下げる姿。仕事を休んで全国へ講演に飛び回る日々。そして自宅で花に囲まれた真緒さんの遺影。真樹さんと一緒に楽しく食事をしている時も、真緒さんの話題になると表情が一変した。

真樹さんの言葉や振る舞いには、真緒さんの「不在」がくっきりと刻まれていた。事故から3年して私は事件や事故の担当から外れ、仕事の上では遺族から話を聞く立場ではなくなった。時とともに、事故への社会の関心は薄れてきていた。それでも、定期的に会った。真緒さんと事故に巻き込まれ、自身もけがを負った1歳年上の姉は小学校を卒業し、妹は真緒さんより身長が高くなった。時間の経過は、真緒さんの「不在」をより際立たせた。

真樹さんら遺族を知れば知るほど、「事故が起こらず、真樹さんと出会うことがなかったなら、どれだけよかったか」という葛藤が募ってくる。真樹さんと

の関係を深めることは、事故の理不尽さを強めるように思えた。関わり続けることがよいとは思えない一方で、話を聞き続けたかった。

関係を深めるほど、出会わなければよかったという思いが募る不条理な関係性。しかし、こうした関係を通してこそ、かけがえのない真緒さんの「命の尊厳」が私に立ち現れてきた。事故そのものが、あまりにも理不尽だった。周囲から愛され、楽しく学校に通っていた人たちが、突然、後ろから来た車にはね飛ばされて亡くなる事態が、容易に理解できるはずはない。納得できることは永遠にないかもしれない。真樹さんと私の不条理な関係は、理不尽な事故によって失われた命のかけがえのなさを象徴しているように思えた。

2017年4月、事故から5年たった現場を歩く私にわき起こったのは、真樹さんとの不条理な関係を通し、真緒さんの命の尊厳が立ち現れてくる不可思議さだったのだろう。

3 ひっそりと報じられる殺人事件 — 忘れられた尊厳

亀岡集団登校事故のように、ひとつの交通事故や事件を数年にわたって取材し続けるケースはまれだ。多くの殺人事件では、大きな記事になることもなく、日々の仕事に紛れて忘れ去ってしまう。ただ私には、街の片隅で発生してほとんど顧みられない故に、気になっている殺人事件がある。

5年ほど前、京都市内のマンションの一室で高齢男性が刺殺されているのが見つかった。一報を聞いて向かった現場のマンションは、全体的に黒ずみ廃墟と見まがうような外観だった。周囲は上品な家屋の並ぶ住宅街だけに、余計に際立った。

5階建てほどの建物だったが、ほとんどの部屋は空室で、男性を知っている住民にはなかなか出くわさなかった。敷地内は雑草が茂っていてごみが散乱し、各部屋に通じる廊下は黒く汚れていた。マンションを出入りする数少ない住民や周辺の民家で聞き込みを続けても、亡くなった男性を知る人は少なかった。ようやく、近くに独居する高齢女性が数少ない親しい知り合いと分かった。

女性はアパートの一室に住んでおり、こちらもちまた、2階建ての崩れそうなほど古い建物だった。呼び鈴を押す。出てきた女性は、知り合いの男性が亡くなったことを理解していない。6畳ほどの居間とキッチンがあるだけの小さな居室だった。数十分、話を聞こうと努力したが、うまくかみ合わない。亡くなった男性の写真を見せてもらったが、ピントがずれていて、表情はほとんど分からなかった。記事に掲載するために、カメラで接写させてもらい、辞去した。その後にも会う機会があったが、私のことは覚えていないようだった。

女性以外にも、場末のスナックなど数少ない男性の足跡をたどったがめぼし

い話はなかった。ごく狭い範囲の交際だったようで、街の片隅でひっそりと暮らす感じが感じられた。同僚との取材の限りでは、男性が親しかったのは、私が会った女性ともう一人、同じマンションに住む知人男性だけだった。

事件発生の紙面は社会面トップだったが、人柄を伝える内容はほとんどなかった。事件から半年後、殺人容疑で逮捕されたのは、亡くなった男性と付き合いのあった同じマンションに住む男性だった。逮捕を伝える記事は、社会面の隅に短く載っただけだった。私は紙面を組む担当ではなかったが、①被害者が高齢である②関係者に著明性や社会的地位のある人がいない③私的な怨恨が動機とみられる—といった点がニュースの大きさに反映したと考えられる。

記事としての大小と、亡くなった人のかげがえのなさは別である。だが私には、亡くなった男性の命の尊厳は、立ち現れてこなかった。もし亡くなった男性の知り合いである女性とうまく話せたなら、また違ったかもしれない。女性とコミュニケーションが難しいことが壁となってしまった。私は男性の死の意味について深く考えることなく、新たに起こったほかの事件や事故の取材に追われていった。ほとんど誰にも顧みられずに失われた命として、私の脳裏には残っている。

私が警察や司法関係を担っていた4年間に取材した多くの殺人事件や事故は、京都の殺人事件のような経緯をたどった。全ての事件や事故に、亀岡集団登校事故のように力を割ける訳ではなく、私が亡くなった人を知ろうとすることを望まない遺族も多い。私にとって多くの他人の命は、ありありとした実感が伴って立ち現れてくる訳ではない。よいこととは思わないが、「そういうものだ」と割り切っていた。

4 旧優生保護法—傷つけられた尊厳

現在、旧優生保護法に基づき、知的障害などを理由として不妊手術が行われた実態の掘り起こしが進んでいる。今年1月には、旧優生保護法によって不妊手術を受けさせられたのは憲法違反だとして知的障害のある女性が、仙台地裁に提訴した。

提訴する約2週間前、宮城県にある原告女性の家に伺った。女性の横に座った義理の姉が、主に説明した。女性はにこにこしながら私を見つめてくれるが、手術について尋ねても「覚えていない」という返事。義姉によれば、女性はほとんど読み書きできず、提訴についてはあまり理解できていない。ただ40年以上一緒に暮らしてきた義姉は、障害を理由に不妊手術を受けさせられたことをずっと疑問に思ってきて、今回の提訴に至ったという。

義姉を通して初めて曝された原告女性への不当な手術。それは同時に、障害

によって声を上げられない人が、まだ多く存在していることを示唆している。

今から考えれば、障害を理由に、「生殖」という生命にとって大切な営みを奪った行為は、到底容認できることではない。だが、旧優生保護法は1996年まで存続していた。旧優生保護法下での強制不妊手術を「障害者差別」と批判する理念は、決して古くから広く共有されてきた訳ではない。

半世紀ほど前に障害のある女性へ不妊手術をしたことがあるという80代の男性医師に話を聞くことができた。何度も妊娠しては中絶を繰り返す女性がいるということで、保健所から依頼された。知的障害か精神疾患の女性で、意思疎通はできなかったという。「今から思えばとんでもないが、当時は合法だし、そんなものかと思っていた」と振り返る。保健所の職員から礼を言われたのが印象に残っていると話した。

男性医師は私の質問に誠実に受け答えしてくれた。恐らく、患者からの信頼が篤い医師なのだろう。ただ男性医師の説明の背景には、「迷惑をかける障害者に医療の技術を使うことで、周りに受け入れてもらえるようにできた」という考え方が垣間見える。当時は、障害のある人は「周囲に迷惑をかける人」であり、「医師は障害者の同意なく手術して構わない」という価値観が存在していたのだろう。障害のある人の尊厳は、置き去りにされていたように映る。

私には、男性医師が他人事とは思えない。障害のある人への不妊手術を妥当と判断した男性医師と、京都の殺人事件で亡くなった男性の尊厳を深く考えることのなかった私には、共通している部分があるように感じる。男性医師は当時の社会通念に沿って、特に疑問を覚えずに障害のある女性に不妊手術をした。私も、亡くなった男性の死を、一般的なニュース価値の判断基準に従って取材し、誰にも顧みられない命について深く考えることはなかった。旧優生保護法下での不妊手術は、直接、障害のある人の体に侵襲を加えた行為であって、私のような「見て見ぬ振り」とは違うかもしれない。しかし旧優生保護法についても本来は、障害のある人への差別を「見て見ぬ振り」してきた社会全体が批判されるべきである。私の京都の高齢者殺人の取材についても、高齢者の命を軽くみるなど何らかの差別を内包していたとして将来、問い直される可能性がある。

全ての命の尊厳をありありと感じ取ることは、不可能に近い。しかしありありと尊厳を感じ取れない命とおざなりに向き合うことは、罪を生み出す可能性を孕んでいる。

5 罪と隣り合わせの尊厳

命の尊厳をありありと実感する機会は、求めて得られるものではない。亀岡

集団登校事故では、長い年月をかけた付き合いが予期せぬ契機をもたらした。一方で社会には、人の生死にかかわる出来事は無数にあり、すべての命の尊厳を私一人が実感することは不可能と思える。尊厳が立ち現れてこない場合でも、社会通念に沿って失礼のないよう振る舞う訳だが、無批判に社会通念に従うだけでは、時として特定の命の尊厳を見落としてしまう恐れを孕んでいる。旧優生保護法下の不妊手術では、障害者差別を孕んだ社会通念で障害のある人の生の尊厳が置き去りにされ、強制的な不妊手術が行われた。誰かの命の尊厳を意図せずともなおざりにし、毀損してしまう危険性は今の私たちにも無縁ではない。どうすればよいか。いくつかの道筋があり得るようには思える。

すべての命の尊厳を等しく認める理念を社会に広めるというのが、まず考えられる方法だろう。誰もが受け入れやすい理念ではある。ただ本当に、普遍的な命の尊厳に関する理念を打ち立てることは可能だろうか。例えば、全ての人間の生の尊厳を認めるとして、動物はどうなるのか。痛みなど人間と共通した感覚を持つと推定できる一部の動物だけに限って認めればよいのだろうか。昆虫や植物、菌類や細菌はどうなのか。人類の歴史では、奴隷制度など有色人種には命の尊厳が認められない時期があった。現状行われている動物実験や畜産業、農業はいずれ、過ちであったと見なされる時期が来るかもしれない。かといって、全ての命の尊厳を等しく認めていては、私たちは何も食べることができず死ぬしかない。どこかで線引きが必要な訳だが、その時、何らかの命の尊厳を奪うことにはならないか。議論は尽きない。だが、すべての命の尊厳を認める理念の可能性を追究することが重要な試みであることに疑いはない。

神への信仰も、一つの答えになり得るだろう。ここでは神を、あまねく命に尊厳を与えてくれる超越的な存在と捉える。神ならば、私がありありと感じられない多くの命の尊厳も、私の代わりに守ってくれるはずである。私が神との関係を深め、神の尊厳をありありと実感できれば、全ての命の尊厳を認めることになるのではないか。私は特定の宗教に帰依している訳ではないが、こうした神の存在には大いに意義を感じる。

しかし、理念的な命の尊厳にしろ、神への信仰を介して感じる命の尊厳にしろ、いずれからも大切な何かは欠け落ちている。

私が小谷真樹さんを通じて感じ取った真緒さんの存在のかけがえのなさは、個別的な関係から生まれたものである。誰もが持っている尊厳であるはずだが、私にとっては、「真緒さんのかけがえのなさ」がはつきりと立ち現れた。理念的な命の尊厳や神への信仰を介した尊厳からは、「この命の尊厳」が失われてしまうのである。私は、個別の関係性から立ち上がる命の尊厳こそ、最も大切と実感できる。一方で、「個別的な関係を結んだ命を重んじる」ということは、意図せずとも、私と関係を結ばないほかの命と差をつくることになり、時にその尊

厳を毀損する恐れを孕んでいる。

しかしあえて言えば、私は罪を犯す可能性を引き受けなければならないと思っている。差別などで尊厳の毀損を生じさせないように、既成の社会通念を絶えず批判的に捉え、尊厳の毀損をなくすよう努める必要性は強調してし過ぎることはない。神への信仰は現代社会では広い共感を得にくいだろうが、理念的な尊厳の理解はさらに議論を深めていくべきである。それでも、「個別性から立ち現れる命の尊厳」には「理念や神を通して理解する命の尊厳」とは異なる重みがあるのは事実だ。

罪を犯す怖れを引き受けつつ、目の前の関係を選び取る。私はそこに、無謬性や神とは異なる「人間の領域」があると考えている。人間の意志や自由は、罪を犯す可能性を孕んでこそ浮かび上がってくるのではないか。同時に注意が必要なのは、目の前の命と個別的な関係を選び取ることで、ほかの命の尊厳を脅かさない努力も可能な限り尽くすべきという点である。罪を犯す怖れを引き受けることと、罪を犯しても仕方ないと開き直すことは違う。後者ではもはや罪の意識は消え去っているからだ。

罪を犯さないように全力を尽くしつつ、罪を犯すことを引き受ける。一見、不条理な立場に映るかもしれない。しかし、そんな狭い道を通じてしか立ち現れてこない「命の尊厳」が、確かにある。

6 残された問い — 個別的な関係を通して見いだせる別の命の尊厳

最後に、考察を通して私の中に新たに浮かんできた問題を提示しておきたい。既に説明したように、無数の個別の命と関係性を結べる可能性がある中で、ある個別の関係を選ぶことは、ほかに関係を結び得たかもしれない命をなおざりにし、それらの尊厳を毀損する恐れを孕んでいる。個別の命と関係を深めれば深めるほど、ほかの命の尊厳を毀損する怖れが私に迫ってくる。

こうした構造は、小谷真樹さん・真緒さん親子と、私の関係にも通じる部分がある。真樹さんと私の個別的な関係は、娘の真緒さんの尊厳が事故によって毀損されたという事態とともに形成され始めた。だからこそ、真樹さんとの関わりが深まるほど、真緒さんの尊厳が理不尽に毀損されたという事実が私に迫ってきたのだった。「真樹さんと個別的な関係を深めるほど迫ってくる真緒さんの尊厳の毀損」という構造は、「個別的な関係を深めるほど迫ってくるほかの命の尊厳を毀損する怖れ」という構造とよく似ている。

しかし大きな違いがある。真樹さんの振る舞いにははっきりと真緒さんの「不在」が刻印されていた。私が個別の関係を結んだ真樹さんに、別の個別な存在である真緒さんの「不在」が見いだされたのである。娘の真緒さんの「不在」

を背負う真樹さんとの関係を通じて、理不尽な事故に見舞われてもなお毀損され尽くしていない真緒さんの「尊厳」が、私に感じ取れた。個別的な関係を通して、別の命の尊厳が立ち現れたのだ。

真樹さんと私は、大規模な事故の遺族と記者という特殊な関係であるかもしれない。こうした事態は、ある命と個別的な関係を結ぶほかのケースでは生じないのだろうか。私は、必ずしも生じないとは言い切れないと思っている。

ある命と個別の関係を結ぶということは、ほかの命とは異なる特別な関係を作るということである。その際、ほかの命は一時的にせよ「なきもの」と見なされるのではないか。そうだとすれば、私が個別の関係性を結んだ命に、ほかの命の「不在」のような痕跡を見いだせるかもしれない。個別の命との関係を深めることを通して、ほかの命の尊厳が立ち現れる可能性が生じるのである。

私自身は、こうした事態を実感した経験はない。考えるべき点はたくさんある。現状で既に浮かんでいる論点を示しておきたい。

まず、個別の命との関係を深めることでほかの命の尊厳が立ち現れ得るとしても、常に、個別的な関係を結んだ命の中にほかの命の「不在」のような痕跡が見いだせるとは思えない。また、『『不在』のような痕跡』について、もう少し明確に定義する必要もあるだろう。少なくとも、私が真樹さんを通して感じたような真緒さんの「不在」とは異なるはずだ。さらに、「不在」のような痕跡を見いだせるとしても、無数の命の尊厳を感じ取れるとは思えない。個別的な関係を通して、無数の別の命の尊厳を感じ取れる訳ではないだろう。

まだ荒削りな考えである。しかし、目の前の命との個別的な関係を通じて、そこにはいない命の尊厳が立ち現れるという事態は、大きな可能性を秘めているように感じている。個別性の壁を破る端緒となり得るかもしれない。

今後の課題として考察を続けることを記して、稿を閉じたいと思う。